

真白き魔導聖女
上巻 (体験版)

作
.:
@
1
0
3
9

■登場人物

ユア・サリスティアス

11歳。真白き聖女と呼ばれ、民衆から絶大な信頼と賞賛を受けている幼き少女司祭。3歳のころから不思議な力を持つと言われると、孤児院で育っていたのをグループによって教団へと引き取られた。

長い黒髪は常にしっとり煌き、透き通るように白い肌と美しいコントラストを描く。真っ白な法衣をまとい、同色の手袋と革靴を履いている。他の司祭と同じく神の奇跡を起こす力を持つているが、最近はずかしく力が出せなくなっている。

マイン・ジエイシツズ

21歳。教団を守る黒竜騎士団の騎士隊長。優れた知性、指揮能力、群を抜く剣技で若くして隊長となり、ゆくゆくは騎士団長になると目されている。しかし、教団の内部を知る内に懐疑心を抱き、廃棄層のレジスタンスと関係を持つようになる。

サラサラとした金髪、青い眼でいかにも二枚目といった風貌だが、屈強な身体を特殊な金属と技術で作られた全身鎧で覆っているため、顔以外の露出部分がない。日に焼けることはないため肌は白い。

アクセル・ベインリーグ

29歳。レジスタンスの屈強な戦士。戦闘能力もさることながら、判断力や戦術眼もあるので特殊な単独任務も任せられる。

2メートル近い巨体を剛毛が覆っている。重たい鎧などは好まないため、普段は濃紺のつなぎを着て、厚底のブーツと皮手袋をしていて、作業員のようにも見える。髪は茶色で短く刈っていて、無精ひげを生やしている。

フロウ・レンスファイア

18歳。銀髪の女豹の異名をとるレジスタンスの若き女戦士。10歳の時、両親を教団に殺され、廃棄層に逃げ込んだところをアクセルに拾われる。以来、アクセルの部下として共に戦い、今ではアクセルの片腕として働いている。ナイフとウィップを巧みに操る。

長い銀髪を黒いリボンでポニーテールにしている。黒い革のジャンパーとミニスカートを着用。ジャンパーのジッパーをいつも下ろしている。ノーブラの胸元を大胆に見せている。10歳の頃からアクセルに散々罵られているせいか、Fカップの巨乳になっているので窮屈だかららしい。ミニスカートには大きなスリットが入っていて、黒い網タイツを履いた腿が覗く。黒いロングブーツを履いた脚は細く引き締まっている。

パルマー・ジエンカルハツド

58歳。妻子も両親も教団に殺され、瀕死の重傷を負って地下で目を覚ます。だが、復讐の決意を生きる糧にして、三十年以上もかけてレジスタンスを築き、戦い続け、そして、魔導潜水艦の伝説を発見した。

遅しい体つきだが、無数の傷跡が残っている。年寄りも老いた風貌で、白い長髪と長い髭。硬い皺で覆われた厳しい顔つき。だが、燃えるような怒れる意志の向こうに優しさを持ってもいる。

グルーム・デルキアコシス

80歳。カテドラルを支配する教団の長である大司教。幼少の頃のユアを見出し、実の孫のように大切に育ててきた。また、独善的な教団の体質も変えようと奮闘していた。

しかし、外海よりやってきた魔導士ドウムを側に置くようになってからは人格が変わったような独裁者となり、ユアにも毒牙を向ける。背も高いが、分厚い脂肪も身に着けていて、たるんだ腹を抱えるようにして歩くほど。長いひげと深い皺のせいで顔の表情は見えにくい。

ダウデイ・シエンバリアン

52歳。人格が変わってからのグルームに取り入った腰ぎんちやくのような男。司教の地位を利用して、私欲を満たしている。

ねずみのような顔をしていて、喋り方もいやらしい。ただ、若い頃は潔癖な性格で強力な奇跡の力を持っていた。その後、任地で若い娘から嫌がらせを受けたせいで性格がねじまがつたらしい。

ドウム・オグノオルド

?歳。外海よりカテドラルにやってきた謎の多い男。失われた魔導の力を持っており、神殿の中で魔導生物を作る研究をしている。教団には代々魔導の力を持つ魔導士が外海より招聘されている。

黒いへびの革で編んだマントをはおり、その下に魔導の力で強化した筋骨隆々の身体を隠している。

「大司教、恐れ入りますが、本気でそのようなことを考えておられるのですか？」

黒い竜の紋章が刻まれた漆黒の甲冑に全身を包んだ青年が声を荒げる。その視線の先にはカテドラル島を支配する教団を司る、大司教グルーム・デルキアコシスが重い体軀を揺らして窓に向かって歩いていく。脂肪によつて樽のような腹をしているグルームは、白地に金色の糸で刺繍を施した法衣を身にまとっている。文字通り支配の糧を身にまとった巨漢の神の従僕が、陽光の差し込む大きな窓から、はるか眼下の地上を見下ろす。

「ふむ………私………正気を失っているともいえるのか？」

大司教が険悪な面持ちで振り返りながら、肝が冷えるほどの静かな声で聞き返す。黒竜騎士団の若き騎士隊長マイン・ジェイシツズは、思わず少したじろいだ。5人いる騎士隊長の中でも、最も勇敢で未来の騎士団長とも言われているマインとはいえ、教団の最高権力者であり実質上のカテドラルの支配者である大司教の前では少しの口答えも許されない。

「この教団において司祭と認められるのは、神の奇跡を行使できるものだけだ」

グルームは執務机の向こう側まで歩き、豪華な椅子に巨軀を沈めながら言葉を継いだ。神の奇跡とは、教団が崇める創造主の力を現実を起こすことだ。それは傷や病の治療であったり、物質の還元や浄化であったりする。神の啓示を受けた者は、教団から司祭や司教の地位を授かり、島の各地に派遣されて人々のために働くことになる。マインたち黒竜騎士団は、彼ら司祭や司教らを護り助ける役目を負っている。島には神をも恐れぬ怪物や盗賊が跋扈しているのだ。それらを駆逐するのも教団の責務とされている。

「だが神の奇跡を行えなくなれば、その者が司祭である意味はない。まして、神によつて与えられた力が剥奪されたというのでは、それにはよほどの理由があるに違いない」

大司教が言っているのは、今この部屋に向かっているユアのことだ。教団始まって以来、最年少で司祭と認められた少女が、この頃神の力を行使できなくなっているというのは島中での話題になっている。

マインは聖女の行脚に常に随伴し、そこで彼女が奇跡を行使するのを目の当たりにしてきた。なにより彼女の人々に対する分け隔てない献身ぶりは、聖女と敬われるにふさわしいものだ。青年は真白き聖女を尊敬し全幅の信頼をし、全力を賭して献身してきた。だから、ユアが神の力を剥奪されたというようなことは信じられないし、信じたくもなかった。彼女は、マインにとってまさに神の申し子なのだ。

「彼女は真白き聖女と多くの民衆から称えられるほどです。神が彼女から力を剥奪することなどありえませんか」

「分らんかな。それを証明するために彼女をここに呼んでいるのだ」

執務室のドアがノックされ、ダウデイ・シエンバリアン司教が部屋に入ってきた。突き出た前歯と鷲鼻が特徴的で、陰険な性格であり、大司教の腰ぎんちゃくとして多くの人から忌み嫌われている。この男の密告によって教団を追放された者は数知れない。前の大司教が病気で亡くなる前、次期大司教と噂されていたグルームに取り入り、今の地位にいる。そんな男でも神の力を授かるのがマインにとっては不思議で仕方がない。噂では、かつては潔癖で理性的な男だったのが、ある居住区で若い娘に虐げられたことで暗くねじまがった性格になったとも言われているが。

グルームは魔導機関を管理するドウームという魔導士と、この陰湿な男を信用し、その二人の意見には特別に耳を貸す。魔導機関を動かす魔導の力を持つ魔導士。彼らは外海から招聘されているのだが、ドウームが来てからは他の魔導士は姿を消し、再び外海から来ることもなくなった。本人の言葉では、魔導士の国で戦争が起きたからと言うが、真偽は定かではない。黒マントを羽織って地下で奇妙な生物を生み出す研究をしている男を、マインは信用する気になれないからだ。

温和な人柄で有名だったグルームは、ダウデイの口車に乗せられ、教団にとって邪魔な者や反逆者をカテドラル島の地下廃棄層に追放する圧政者へと変わっていった。少なくともマインには、そう思える。

「これはこれは、若き騎士隊長どの。いつ見ても凛々しいお姿ですな」

耳障りな甲高い声で、嫌らしい笑みを浮かべながらダウデイ司教がマインに向かって恭しく頭を垂れる。影では騎士を筋肉バカとあざ笑っていることを知っているマインは、冷淡に会釈を返した。

「まもなくユア・サリスティア司祭もお見えになるでしょう」

ダウデイの言葉にグルームはうなずきを返す。マインはひとつ気にかかることを思い出した。以前、若い女性がダウデイに執拗に体を触られ、嫌がっているところをユアが目撃し、激しく非難したことがあるのだ。そこにはマインやそれ以外の人もいたので、ダウデイは屈辱に顔を真っ赤にしていたのを今でもはっきりと覚えている。まさかそんなことでダウデイが仕返しを企むとも限らないのだが。

再び扉がノックされ、グルームの従者を務める騎士見習いの若者が入ってきた。

「大司教、ユア・サリスティア司祭がお見えになりました」

グルームがうなずくと若者は戸口の端へ身を避け、真白き聖女ユア司祭を執務室へと招き入れて、恭しいお辞儀をしてから部屋を去っていた。

「失礼致します。グルーム大司教」

ユアはグルームとダウデイにゆっくりとお辞儀をしたが、部屋の隅にいたマインに気づくにつこりと微笑んだ。マインは少しどぎまぎしながら、ぎこちなく会釈を返す。

「まあ掛けたまえ、ユア司祭。よく来てくれたといたいたいところだが、しかし、今日のところはそうはいかんだ」
執務機の向こうから正面のソファに腰掛けるよう勧めながら、グルームがいかにも言いにくそうに言葉を濁す。

「どういったご用件なのでしょう？」

ユアは常のように振舞っているつもりだが、まだあどけない顔を不安で曇らせている。謁見の間という公共の場ではなく、大司教の執務室での私見ということだから、内密の話には違いない。そして、内密の話に余り良いものはない。それを裏付けるようにいつにも増して大司教の口が重くなっている。まだ少女が3歳の頃、孤児だったユアの力を見抜いて教団へと引き取り、今日までの八年間、祖父のように育ててくれた大司教。ここ数年は、人が変わったようになってしまったが、黒髪の少女にとっては、目の前の老人は今でも優しい祖父なのだ。その老人が、自分に対して何か言いにくい心配事を抱いている。

「率直に言わせて貰うがね……君はここ最近、神の奇跡を起こすことができないそうだね、ユア司祭。そのせいで教務も疎かになっているそうではないか」

中々本題を切り出せないグルームが変わって、ダウデイが横から口を挟んだ。

「はい……」

ユアの沈うつな声を聞いて、ダウデイの口許がにやりと歪んだ。それを見た騎士隊長は、ぐっと拳に力を込める。

「君に限ってそのようなことはないとは思うがね……影で神に見限られるようなことをしているのではないか、という噂も起きているほどのだがね」

その話を聞いて、ちくりと小さな胸が痛んだ。今朝方の奇怪な出来事を思い出したのだ。深夜の指戯を誰かに感づかれでもしたのだろうか
と心配になる。不安げなまなざしでマインを見ると、彼はついと目を逸らす。大司教の方は、厳しい表情でユアを見ている。

「そこで、今日ここで、真偽のほどを確かめようというわけだ」

ようやく重い口を開いてグルームが言葉を継いだ。昏い感情を秘めた声で。

「確かめる？」

少女ながらに凛々しさを見せるユアが、いぶかしげに言った。

「ユア司祭は、カテドラルに伝わる欲望の魔女ルナの伝説をご存知かね？」

ねずみのような顔をした司祭が、黒髪の聖女の座るソファの後ろに来て、そのか細い肩に両手を置きながら尋ねると、少女司祭は、静かに「はい」と言っとうなずく。

「魔女は、元は教団の司祭だったが……そう、今のあなたと同じように。しかし、神に背き、欲望の虜となったルナは教団を追放され、その恨みから教団の女性司祭に呪いをかけるようになったという」

ユアもその伝説は知っていたが、そんな話は女性司祭を戒めるための作り話に過ぎないと考えていた。もとより指戯のことはさておいて、ユアは伝説となるほどの淫蕩ぶりを発揮した魔女のように淫らな欲望は抱いていない。あの悪夢のような出来事は、何かの間違いだと自分に言い聞かせた上でだが。

しかし突然、ダウデイ司祭は肩に置いた手を下に滑らせユアの両手首を握ると、隠し持っていたロープで後ろ手に縛り上げていく。思わず少女は悲鳴を上げる。

「きゃあー！」

「何を、ダウデイ司教！」

若き騎士隊長が色めきだつて声をあげたが、ダウデイは意にも介さない。恰幅のいい大司教は、部下である黒竜騎士を制する様に片手を挙げながら立ちあがり、幼き司祭の方へと歩を進める。

「落ち着け、マイン騎士隊長。これは、万が一の予防措置にすぎん。ユア司祭には申し訳ないが……」

「予防措置……ですか？」

膨れ上がった腹を揺らす大司教が大仰にうなずいたが、ダウデイはあからさまにニヤニヤしている。それを見ると、血気盛んな青年は膨れ上がる疑念と怒りを払拭できない。

「もしユア司祭が魔女に呪いをかけられていたら、我々にどのような抵抗をするかもわからん。魔女の魔導の力は、我らの神聖な法力でも簡単にはあしらえんからな。これは、我々と彼女自身の安全を守るためでもあるのだ」

マインはまだ納得がいかない様子だったが、渋々了解したというように身を引く。

「ユア司祭もかまわんな。これは、君の潔白を証明するためののだ」

「……は、はい」

消え入りそうなほどの震えた声で返事をしたが、やがて真白き聖女はしっかりと顔を上げると、マインが驚くほど凜とした声を響かせる。「何なりとお気の済むようになさってください。私は何があるかと、神の御心を信じていますから……」

これも神が与えた試練だと思い、なんと少しでも耐え抜こうという強い意思が彼女の小さな胸に秘められているのだ。だが、それとは別の異質な感情がユアの中には沸き起こっている。先ほどからダウデイの両手が、ユアの肩や首をいやらしく撫で回していたのだが、それによって体の芯が熱くなってくるのを感じていたのだ。あの悪夢が黒雲のようにむくむくと脳裏に蘇ってくる。

実は、神殿に入って執務室に来るにはエレベーターを使わねばならないのだが、そのエレベーターの中の妙な甘い香りを嗅いだ時から違和感を覚えていた。少し以前から感じるようになった、夜寝る前などに胸が切なくなるあの感覚に似ている。何度かその感情に身を任せて、決してやっつてはいけなさと分かっている指戯に興じてしまったことがある。その時は大いに後悔し、二度とあさましい秘事には没頭しまいと神に誓うのだが、それでも甘い疼きに効し難くなって切ない慰みをしてしまう。あの時と同じさざ波が、少女の中に起こりつつあるのだ。

だが、ふしだらな手を避けようにも、両手は縄で戒められ華奢な身体はダウデイによってソファに押さえつけられている。すがるような思いでマインを見たが、怒りを押さえつけている騎士隊長は、耐えるんだという視線を返すだけ。騎士の立場も理解している少女はうなだれるしかなかった。

その時、ユアのか細い太ももに手が置かれ、びくつとして身体が跳ね上がる。目を上げると、長いひげを揺らす大司教が孫のような少女の前で片膝をついて、右手を太ももに伸ばしている。

「大丈夫かね。司祭」

本当の祖父のように優しく囁くグroomsが右手を動かすと、声音とは裏腹にぞくりとするような、寒気とも快感とも分からぬ感覚が背筋を駆け抜けていく。

「は……はい……大丈夫です」

だが、薄い法衣を通して感じる大司教の右手は、ユアにとってはまるで灼熱の塊のように感じられる。その熱い感触がじんわりと肌に染み込んできて、身体の奥底にまで熱を送り込んでくるのだ。

「ひいっ……あつ、うう……」

不意に背後にいたダウデイが耳の後ろをなで上げたので、思わず小鳥のような声をあげてしまう。自分の痴態に恥ずかしさで顔が真っ赤になる。そして、秘唇の間から何かトロリと流れ落ちるのを感じて、背筋が凍りつく。

「ユア司祭、まさかとは思うがね、この神聖な神殿の中で淫らな欲望を抱いているのではないでしょうね？」

ねずみに似た小男が意地悪く言う。ユアは必死になって、首を振って否定する。感情が暴発しそうな黒竜騎士はもはや事態を直視できず、顔をそむけてぐつと歯を食いしばっている。だが、青年の思いなどお構いなしに、支配者による幼き神の従僕への試練が続く。

「では、確かめてみても構わんな？」

大司教が言ったが、その意味もわからぬまま、ユアは首を縦に振ってしまふ。すると、グルームは、ユアの法衣の首から足元までを止めているボタンのうち、腰のあたりのボタンを左手ではずし、止める間もなく右手を滑りこませる。視界の端でその動きを捉えたマインは目をむいたが、か弱い少女を押さえつけているダウデイも神妙な面持ちのグルームも顔色一つ変えない。

老齢の聖職者は、直に陶磁器のような真つ白で滑らかな太ももの感触を味わうように撫で回し、おもむろに飾り気のない下着が覆う股間の部分へと右手を移動させていく。

「だ、大司教！ い、一体……何をなさるのですか？ こ、このような破廉恥な行為が何の証明に……！」

「何を言う、ユア司祭！ これは君のためにやっていることだぞ。魔女の呪いをかけられた者は、欲望に満ちた淫らな蜜をここから出すという。それを確かめねばならぬのだ」

両手を縛られ、最も大切な部分を生まれて始めて男性に触れられているという状況に、聖女は今や本来の少女に戻って涙を浮かべている。「わ、私は……み、淫らな蜜など出しません！」

必死になって否定しようと悲鳴に近い声をあげたが、深いしわで表情も見えない大司教は、少女が懸命に閉じようとしている両腿の間に右手を差し込み、無遠慮に股間をまさぐっている。無毛の縦筋を撫ぜられるそのおぞましい感覚は、太ももや首筋を愛撫される以上の快感をユアにもたらしていく。声は押さえているものの、顔は上気し、呼吸が荒くなってしまふ。

「……では、司祭。この私の右手に感じる湿り気はなんだね？」

地獄から響くような低い、静かな声が長い髭の下から発せられる。

「し、湿ってなどいけません。……どうせ、汗か何かでしょう」

震えた声で答える。ふむと唸った大司教は法衣から抜き取った右手を自らの膨れた鼻の下に持つていく。

「そうかな？ このすえたいやらしい匂いは、汗の匂いとは違うが」

「そ、そのようなことは、決してありません！」

グルームのおぞましい行為と辱めの言葉、そして今の状況に目の前が真っ暗になる思いだったが、なおもユアは気丈に振舞っていた。だが、いまやグルームの瞳にはあやしい鈍い光が煌々と灯っている。

「では、この場にいるダウデイ司祭とメイン騎士隊長の立会いのもとに、じっくりと検分してみようではないか」

言うが早い、グルームは両手を伸ばしてユアの小さな身体を包む法衣のボタンを引きちぎって、法衣の前をはだけ、少女の下着姿を曝け出した。

「いやあっ!!」

ユアは悲鳴を上げたが、身体を隠そうにも両手は後ろで縛られているため、幼い肢体は男たちの眼前に無防備にさらされてしまう。

「どうだね。見たまえ、ダウデイ司祭、メイン騎士隊長。ユア司祭も自分自身の目で確かめるがいいぞ」

そう言うと、老齡の割に強い力で少女の両膝を手で押し広げていく。細かい身体の聖女には巨漢の司祭の力に抗しようもなく、M字開脚を強要され、股間に浮き出した染みをダウデイと、そしてメインにまでも、まじまじと見られてしまう。ダウデイは、いまや涎もたらさんとし、厳肅な騎士でさえも、美しい聖女の痴態に目を奪われてしまっている。

「お、お止めください大司教！ このような恥ずかしい格好をさせられては……わ、私は……私は……ああ……」

「恥ずかしい？ 欲望の虜となった君は、この姿を喜んでいないかね？ 君は明らかに淫らな蜜を出しているじゃないかね」

ダウデイが後ろから下卑た笑い声と一緒に言うと、黒い髪を垂らして小さな頭が俯く。

「そ、そんな……そんな……」

ユアは、屈辱と恥ずかしさで涙がこみ上げ、消え入りたい気持ちになっていく。神殿では、聖女と称えられるにふさわしく司祭らしく振舞っているものの、まだ幼い少女であることにはかわりはない。いまや、その体面がガラガラと音を立てて崩れていこうとしている。

「まだ納得がいかなと言うのであれば、この下着も取り去ってしまおうではないか」

またしても言うが早い、グルームは聖女の汚れなき神聖な部分を覆い隠す下着に手をかけ、一気に引きちぎるように剥ぎ取る。

「い、いやっ!! やめてえ!」

両手を縛られたユアには顔を真っ赤にして背ける以外にすべはない。初めて男の眼前に晒された少女の秘園は、誰もが息を飲むほど美しく可憐だった。秘唇の上の丘には毛がなく、愛液が流れ落ちる秘裂が否応なく目に入る。

ユアは屈辱のあまり、泣きそうになるのを持ち前の気丈さで必死に堪える。女として、最も見られたくない姿を衆前に晒している。ユアを

守り続けてきたマインにまで見られたのだ。プライドもたずただが、ここで泣き入っては自らの非を認めるようなものだ。

「ち……違います！ 違うんです!! わ、私が神に背くはずがありません！ 分かってくださるでしょう、大司教！」

非道な仕打ちを受けても気丈に振舞う幼き聖女。こうなってはマインも黙って傍観するわけにはいかなかった。この二人は狂っているに違いない。そう思うと押さえつけていた感情が火を噴く。

「もういい！ やめるんだ二人とも。あんた達は狂っている!!」

腰の剣に手を伸ばすとまではいかないが、恐ろしい殺気を振りまきながら足を踏み出す。神の奇跡の力を与えられている司祭たちだが、騎士を倒すような力は持っていない。しかし、ダウデイが怯えもせず、例のにやにや笑いを浮かべながら顔を振り向ける。

「そうら、貴様も正体を現したな！」

「なんだと？」

「貴様が反乱者と通じているのは、すでにばれているのだ。反逆者め！ 大司教に向かって狂っているなどとよく言えるな！」

青年騎士は血の気が失せる思いだった。罠に嵌められたのだ。この下劣な男は、ユアと同時に自分までも陥れようとしている。そう考えた瞬間、マインの体は意思に反して動き出していた。

「待て！ 反逆者マイン!!」

巨体で行く手を塞ごうとする大司教の制止を無視して、鎧を纏いながらも素早く身体を翻し、マインは扉を押し開けてエレベーターに向かって走っていく。

「馬鹿め、逃げられると思ってるのか？ 大司教は、ここにいてください」

言うと、ダウデイは駆け出し、懐に隠していた無線に何事か怒鳴った。

二人がいなくなると、急に静かになった部屋に、大司教と半裸の少女だけが残された。少女はいまや混乱の局地にあり、大司教も半ば混乱している。だが、グルームの視線の先には、晒し出された汚れなき少女の秘部があり、いまや邪魔する者は一人もない。

「……ユア司祭。こちらもまだ終わったわけではないのだぞ」

「や、やだ……あ、やめ、おやめください……大司教………」

ユアは、これから起こることを予期して、恥辱で真っ赤になった顔を背ける。グルームは、はあはあと荒い息を吐きながら、少女の股間に

顔を埋めていく。グルームの息がそこにかかる、ユアの小さな身体がびくっと跳ねる。

「ふむ、ここは、まだピンクで綺麗なのだがな」

グルームは、ユアのぴたりと閉じた小陰唇に親指を押し当てると、ぐいぐいと強引に開こうとする。そして、ねっとりぬめる舌が徐々に近づいていく。

「ああ、もう、だめ……や、やだよお……もう、やめてえ」

だが、既に司祭の体面を保てなくなった少女の願いもむなし、誰も触れることすら許されないはずのそこに、蟲のように蠢く舌がぬるりと触れる。ユアの秘唇から、愛液がとろとろを流れ落ちた。

「いい味の欲望の蜜がどんどん溢れてくるぞ」

「やあ、聞きたくない……聞きたくないもん……ひあつ」

ユアのとけない嬌声がグルームの脳に響くと、おぞましき聖職者のどす黒い欲望がさらに掻き立てられていく。両手の指で秘唇を押し開き、柔らかな女唇の内側にさらさらした大きな舌を差し込む。

「きやう！……や、だめえ！……あ、あはあああつ！」

ユアは、もう声を押さえることができなかった。焼けるように熱い舌が、なめくじのように秘唇を這い回るたびに電流のような快感が突き抜ける。

グルームはじゅるじゅると音を上げながら秘裂をなめまわすと、今度は亀裂の上にひっそりと息づくクリトリスにしゃぶりつく。

「ああつ……あん、いやあ」

小さな身体がびくびくと跳ね上がり、真珠のような肉粒がぷっくり膨れ上がる。大司教は指でそれをこね回しながら、再び秘裂に舌を這わせていく。分厚い舌がぐりぐりとこじ入れられ、じゅぼじゅぼと抜き差しされると、抑えきれない快感の波が小さな少女に襲いかかってくる。舌が処女膜に触れると、グルームは、笑みを隠しきれなくなった。

「ああん！だ、だめえ！も、もうだめえつ！」

両手を縛られた不自由な体勢で背を弓なりにそらして、ユアは必死で獣のような舌と自らを責め苛む快樂から逃れようともがく。だが、小さな身体は難なく巨漢の老人に抑えつけられてしまう。

「これほど強い欲望にとり憑かれているとは。おまえには、もう司祭でいる資格はないな。なんだこれは？ オマ×コがびしょびしょではな

いか」

愛液で顔をべとべとにしながら、大司教グルームが蔑むように言い放つ。だが、ユアは荒い息をするばかりで、答えることもできない。

「最後に、魔女を祓う刻印を刻んでやろう。そして、おまえは廃棄層に追放されるのだ」

「そ、そんな……」

肥満体の大男が法衣を脱ぎ去り、その巨軀にふさわしい大きな男根を少女の眼前に示す。それは、幼い娘を手箒めにしようとする男の欲望と同様にどす黒く、太い幹を這い回るように浮き上がった血管がグロテスクな有り様を強調している。

「い……いや……ぜったい、やだあ！ やめてえ！ だ、誰か助けて！」

◆この続きは本編をご購入して愉しんでください！